

## 木造密集から超高層の街へ

正会員 伊倉雅晴

新宿駅から西へ15分の所に「我が街」がある。新宿区西新宿5丁目という。この前迄「淀橋」という由緒ある名前だった。西新宿一帯は昭和35年に淀橋浄水場跡地が新宿副都心として都市計画決定されて以来、絶え間なく成長を続けている。都庁の移転、副都心の超高層ビルの建設、青梅街道拡幅、都電の廃止、地下鉄丸の内線、都営大江戸線の新設。

我が街は「木造密集整備地域」である。各所で再開発が進行中であり、各所で再開発の協議が続いている。現状では老朽住居群と超高層オフィスやマンションが混在しているが、地上げされた寂しい街に胸にIDカードを下げた昼間人口が増え活気が溢れてきた。

後30年もすると「木造密集整備地域」は、超高層が連立した街に変貌するだろう。

街の人は圧倒的に地方出身の商人が多かった。サラリーマンは少数派。コミュニティは商人が羽振りを利かせていた。自分の様なサラリーマンの子供は肩身が狭かった。商人も、サラリーマンもこの時代、チャンスが無数にあったので、忙しく一生懸命働いた。商売で儲かると競って歌舞伎町で働く人達を相手の、一間4畳半のアパート経営に乗り出した。

このような契機で密集市街地が形成されていった。アパートの住人は風呂がないから路地を歩いて銭湯へいく。夕方になると装った人達が歌舞伎町へとタクシーで出勤していった。こんなシーンが昭和の時代のこの街の一つの情景だった。

この街で昭和27年から昭和47年までの青春時代を送った。「街」を構成する「家」はことごとく経済活動の拠点であった。地理的利便性のみが街の良さであって、自分にとっては城や神社もなく、森や林もなく、文化ホールや図書館もなかった街。潤いのない街。

街の変化に合わせ自分自身も学生から社会人となり、街は変貌し続けそうだが、自分自身は衰退の齢になった。この街に住んでいなく、余り好きでもない街なのだが、「我が街」と呼ぶ宿命を背負っている。この先どう発展するかが気になる街なのである。

